うす紅の

斜陽かげ射す日に移ろいて 滅びの風は吹き荒ぶ の秋ゆうぐれに

傾く姿痛ましくかたぶょがたいた

懐いは恵迪と共に
はないてき 我が胸に満つ過にし日の映え

うす花いろの夏よい闇に

歌う寮友らの嬉しさに 我が宴にも星降る幸と 憩える帆にも希いありたし たまゆら風はさわやけし 夢こそ恵迪と共に

想いは恵迪と共になる。とも

倒れゆくもの今この時に 暗くも映る空しさに もの音絶えて冷たく寒く 透みわたる風底凍る
がぜそここお うす 紫 の冬あけどきに

> 憧れ恵迪と共に 新しき日のかげろい浮かぶ 咲き初む花の望もて 昔日の影たゆたい惑う されど緑はまだ若くして うす靄けぶる春あけぼのに

> > うつろう四季に感慨をこめて

五.

想いは恵迪を永遠に
はないないできれる。 唯一真実の迪を残さむ ただひたすらに祈り捧ぐ 朽ちゆくものを見つめつつ いまだ乾かぬ血涙をもて

高田和重君 鶴原文孝君 作曲 作歌